

やばい男の嫁

「溺愛スパダリ旦那に狂愛執着されちゃう話」

く前日譚く

これはあなたと優一との出会いの話。

五年前――。

『東条主任……今お時間よろしいでしょうか』

「うん、いいよ」

笑顔で受け答えるも彼女はいつも遠慮がちに俺に話しかける。つい3日前に会社全体で部署異動があった。

俺は営業課の主任となったが『主任』と一定距離を置かれるのもあまり好きではないので、主任呼びをやめることをみんなにお願いするも彼女だけは頑なにやめることはなかった。

『……になります』

「うーん、そっか。先方が納期を変更したいっていうならその要望に応えようか。俺が連絡しておくから君はスケジュール表の更新をお願いしていいかな」

『は、はい』

そそくさと俺から離れていく彼女。あまり好かれていないのだろうか……チームのみんなとは仲良くしたいと思っているものの無理強いは中々できない。

ため息を吐いて仕事に戻る。一つ一つの仕事を丁寧に対応してくれる彼女とは仲良くなりたいたいものだ。

――…

「はあ……」

軽く背伸びをして時計を見ると既に23時を超えていた。繁忙期はいつもこのくらいの時間になるからあまり気にはしていなかったが、チームのみんなは帰宅しているか椅子から立ち上がり確認をする。

「えっ……」

『あ……お疲れ様です』

いつも仕事をしている席に彼女は座っていた。普段はすぐに帰宅していたはずだから、なんだか不思議な気分だった。俺は彼女の傍に近づく。

「どうしたの？ なにか急ぎの作業とかあった？」

『いえ……特にないです』

「それじゃあ、なんでこの時間まで……」

俺の顔を見ることがなく彼女は俯いたまま。他の人から仕事を押し付けられたのだろうか。だとしたらきっと彼女は断れなくてこの時間まで残ってしまったと考えるのが普通だ。

「仕事を押し付けられたりした？ だとしたら俺が……」

『ち、違います！ その……』

言いづらそうに指をモジモジとさせて言うか言わないか、どうしようかと迷っている様子だった。俺は跪いて彼女の視線に合わせる。

『えっ!?!』

「言いづらいなら無理して言わなくていいよ。だけど、君がづらい思いをしていたら嫌なんだ」

『あつ、ち、ちがつ……! 私が残りたくて残ってるんです!』

「どういうこと?」

『東条主任が毎日遅くまでお仕事頑張っているので……私もなにかお手伝いできればいいなって……なので、明日の作業分もまとめておきました』

俺にそう話した彼女は顔を赤らめて恥ずかしそうにしていた。……嫌われていたわけじゃなかったんだ。ただ、あまり話すのが得意じゃないから目を合わせたりしなかったのか。

『……その、余計なお世話でしたらすみません……』

落ち込む彼女に俺は慌てて言葉を発する。

「あ、あぁつ。ごめんね、俺のために残ってくれたことに驚いて……ありがとう。助かるよ……実は君に嫌われているんじゃないかなって思ってたから」

『え? き、嫌いじゃないです!』

「はは、それならいいんだよ。だけど、ほら……主任呼びもやめないから」

『それは……主任は主任なので』

「うーん、それもそうなんだけどね? あまり他人行儀なのは好きじゃないんだ。……そうだ。じゃあ、二人きりのときならいい? 慣れてきたら主任は無しで」

『……はい、分かりました』

一瞬戸惑った表情をしていたが、俺は距離を縮める口実に彼女にお願いをした。これで少しは彼女との距離が縮まればいいなと、淡い期待を寄せながら。

――……

「東条主任……」

「あれ、呼び方……」

『え？ あっ……！ えっと……東条、さん？』

「はい、なんでしょう」

前に話したことを覚えていたようでようやく『東条さん』と呼んでくれるようになった。ふふ、と軽く笑うと彼女は顔を赤らめて俯いてしまった。

その表情が可愛くてもっと見たいと思ってしまう。

『その、ここに判子欲しくて……』

「分かりました」

彼女から渡された資料に判子を押して手渡す。彼女の手が軽く……本当に軽く触れてしまい、それに驚いた彼女の手から紙が落ちてしまった。

『す、すみませんっ！』

「大丈夫だよ」

地面に落ちた紙を彼女が拾おうとするのを止めて、俺が紙を拾う。申し訳なさそうにする彼女に大丈夫だよと紙を渡す。

「はい。触れられたから驚いちゃったよね、ごめんね」

『……っ、私の方こそ……失礼します』

自分の席に戻っていく彼女に魅入ってしまった。というより、あの日からずっと彼女が気になって仕方がない。どうしてこんなにも気になるのだろう。もやもやとした気持ちを抱えながら仕事に戻る。

『えっ、いいの？』

彼女の明るい声が聞こえてきて、なにを話しているのだろうとチラッと席を確認する。別部署の同期……だろうか。この階にはいない人だろうし、彼女も気兼ねなく話しているところを見ると仲がいい人ということが分かる。

『ふふ、そうなんだ』

俺と話しているときと違う態度に少し寂しくなる。あの表情を俺は見たことがない。彼女の笑顔が見たい。どうすれば見られるんだろう。

くしゃっと軽い音がした。手元を確認すると、いつの間にか資料を握りしめている自分がいた。

――……

午前中は仕事に集中ができなくて、彼女のことをずっと考えていたらなにも手につかなかった。時計を確認すると21時。今日は忙しくなかったはずなのに、こんなに遅くなるとは思わなかった。

「はあ……ダメだ。集中しよう」

一人パソコンに向かいボソッと呟く。どうしてこんなにも彼女のことが気になるのだろうか。彼女に笑いかけてほしい。彼女と話したい……。

『……さん』

駄目だ。集中できない。誰かのことを考えすぎてこんなになるなんて思わなかった。今日はもう帰ろう……。ため息を吐いて、目の前を見ると彼女が立っていた。

「わっ……!」

『あつ、ご、ごめんなさいっ。その声をかけたのですが……』

「こちらこそごめんね。ボーっとしちゃって……」

一日中考えていた彼女を目の前にしたら、なんだかうまく言葉が出なかった。いつもならもう少し弾む会話をしていたはずなのに。

『東条さんがまだ残っていたので……大丈夫かなと思って』

「俺のことを心配してくれたの？」

『はい。今日は体調が悪そうな気がして……』

「体調……は、悪くないかな。ちょっと考え事をしていてね」

『考え事ですか?』

「うん」

何を考えているのだろうと気になっているはずなのに、深く聞いてこない彼女はきつと優しいのだろう。人には話したくないこともあるはずだと分かっている。てくれる彼女に、とても感謝している。

「君のことを考えていた」と伝えられたらいいのだろうけど、今それを話したら縮まった距離が離れてしまう気がした。

「……ねこ」

『え?』

「猫カフェに行きたいなと思って。癒しがほしいなって……」

『猫カフェ……』

ポカンとしていた彼女を見て、しまったと思った。午前中から猫カフェに行きたいことを考えているなんて言い訳……通用しないだろう。

こんなことになるなら本当のことを話せばよかった……と後悔して彼女の方をチラッと見る。

『ふっ、東条さん可愛いですね。私もたまに行きたくありません』

微笑む彼女がそこにいた。電気は俺のところしかついてなくて周りは真っ暗なのに、彼女の周りだけがキラキラと輝いていた。

「そう、なんだ……」

その笑顔を見た瞬間に思った。俺は彼女のことを好きなんだと。とても……とても輝いていた。

『東条さん?』

彼女の笑顔を見つめすぎて言葉を失っていたようだ。彼女に心配をされてしまった。

「あ、ごめんね……その、良ければ今度一緒に行きたいな」

『え、私でいいんですか?』

「……うん、君がいいんだよ」



『ありがとうございます。行きたいです』

ふわっと微笑む彼女が可愛い。

彼女のことが好きだ。

色んな姿が見たい。俺だけにしか笑いかけないでほしい。そんなどす黒い気持ちもぶわっと溢れてきている。

自分の気持ちに気づくのが遅すぎた。

きつと彼女を気になっていたときから、俺は彼女に心を奪われていたんだ。そうでなければ、こんなに……彼女を自分のモノにしたいと思うだろうか。

俺が気づいたんだから、他の人も彼女を好きになるはずだ。

彼女を……手に入れたい。

「今のデートのお誘いのつもりだったんだけどな」

『……えっ』

俺の一言に彼女は驚いて顔を真っ赤にしていた。目を俺から逸らして何を答えたらいいのか分からない表情は本当に可愛く思えたんだ。

『あ、あの……嬉しいです。ありがとうございます』

恥ずかしそうに答える彼女が愛おしい。彼女のことをもっと知りたい。もっと……彼女と深くまで繋がりたい。

それこそ、一緒に食事をして、デートをして、俺の家に招いて……家族にも紹介をして……一生俺の傍から離れられないようにしよう。

他の人に取りられる前に――。